

# 9 課

2月28日

## 和解と希望



安息日午後 2月21日

### 暗唱聖句

神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。(Ⅱコリント5:21、口語訳)

罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです。(Ⅱコリント5:21、新共同訳)

### 今週の聖句

コロサイ1:20～29、エフェソ5:27、エフェソ3:17、ローマ8:18、エフェソ1:7～10、エフェソ3:3～6、箴言14:12

### 今週のテーマ

パウロは、コロサイ1:20ではっきりと強調された和解という主題(8課の木曜日参照)を続けて論じます。その聖句では、和解の宇宙的広がりについて説明しましたが、次の節からは、和解が個人的で個別的なものになります。十字架上の死を通して、イエスはすべての人、すべてのもの、特に罪によって神の命から疎外されていた人間との和解を成し遂げられました。今や人間は、信仰を通して神と和解することができます。

「今週の聖句」の中には、個人の和解の過程が詳しく説明されています。宇宙的領域と同様に、それはキリストの死を通して起こります。個人レベルでは、十字架は受動的な象徴ではなく、能動的な現実となり、人々が福音を聞き、栄光の希望なるキリストご自身を受け入れるにつれて、神の愛が人々を変えていきます。

パウロはまた、「世の初めから代々にわたって隠されていた、秘められた計画」(コロ1:26)についても語っています。この秘められた計画とは、何でしょうか。個人と宇宙にとって、どのような意味を持つのでしょうか。この「秘められた計画」は、パウロが熱心に<sup>の</sup>宣べ伝えた福音と、どのように関係しているのでしょうか。

問1 コロサイ1:21、22を読んでください。パウロは、疎外と敵対について言及することで、何を示唆しているのでしょうか。そして、キリストの死がもたらす期待される最終的な結果は何ですか（エフェ5:27も参照）。

パウロは常に、少なくともキリストの義から離れている人間を、悲観的に説明してきました。それから2000年近く経った今日、誰がその考えに異を唱えられるのでしょうか。かつて、ある人はこう言いました。「キリスト教の教理の中で、信仰によって受け入れる必要のない唯一のものは、人間の罪深さだ」

しかし、罪が入り込んで以来、神は、私たちがどんなに悪くとも、自ら進んで私たちをご自分と和解させようとしてくれました。つまり、初めから神は、罪の問題を解決するために、たとえ解決策が十字架でのご自身の死によってしか見いだせないとしても、働いてくれました。

エデンの園で、神は創造の傑作であるアダムに、「どこにいるのか」（創3:9）と呼びかけられました。そして今日も、失われた1匹の羊、つまり私たちを探し続けておられます。神は私たちを1人ずつ探し出されます。神は、創世記3:15の原福音の約束に従って、私たちとサタンの間に敵意を置き、私たちを見いだすという完璧な計画を持っておられるのです。

福音は時として、複雑かつ理論的になりすぎて、21世紀の生活にほとんど意味を持たないことがあります。しかし、実際には非常に単純で明快なものです。

福音には三つの部分があります。

第一に、私たちは自分自身を救うことができないので、イエスが私たちの罪のために〔地上に〕来られ、死なれました（ロマ5:6～8参照）。

第二に、信仰、悔い改め、バプテスマを通して、イエスの死を自分たちのものとして受け入れることで、私たちは義とされ、罪の有罪宣告から解放されます（ロマ5:9～11、6:6、7参照）。

第三に、私たちが今送っている人生は、キリストと結ばれ、キリストの再創造の力を経験し、キリストが私たちの内に生きておられることの結果です（IIコリ5:17～21、ガラ2:20参照）

これらは、必ずしも個別の段階や出来事ではありません。私たちがイエスを自分の人生に受け入れる準備ができるや否や、すべてが一度に起こることもあります。そして、私たちが毎朝キリストに献身するたびに、日々新たにされていきます。私たち1人ひとりが人生でキリストの救いの働きをどう経験したかに関係なく、その基礎は常にイエスの死にあります。私たちは常にそこに戻らなければなりません。

問2 コロサイ1:23(口語訳)を読んでもください。パウロが言うところの、「ゆるぐことがなく、しっかり」信仰に踏みとどまるとは、どういう意味だと思いますか(コロ2:5、エフェ3:17も参照)。

ギリシア語には4種類の「もし」という表現があり、それぞれニュアンスが異なります。コロサイ1:23の冒頭にある「もし」(訳注\*)は、条件が満たされていることを前提としています。つまりパウロは、コロサイの信徒が確かに信仰に踏みとどまるだろうという思いで、励ましているのです。パウロがすぐに伝えているように、彼はすでに彼らの固い信仰の証拠を見えています(コロ2:5)。しかしながら、彼らの希望は依然として条件付きであり、彼らが歩みだした信仰の道を断固として続けるかどうかにかかっているのです。

この断固として続けるというのが、「踏みとどまる」(コロ1:23)と訳されているギリシア語の意味です。この言葉は、<sup>かんづう</sup>姦通の現場で捕まった女をどうすべきか、イエスにしつこく問い続けた律法学者やファリサイ派の人々について使われています(ヨハ8:7)。また、ロデがペトロの声に気づいたものの、ほかの人に告げるために戸を開けないで家の中に駆け込んだあとも、ペトロが戸をたたき続けたことにも使われています(使徒12:16)。また、パウロもこの言葉を用いて、自分が授けた教理と実践的な教えをしっかりと守り続けるよう、テモテに勧めています(1テモ4:16)。ここでのパウロの意味も、信者全般に当てはまるという点を除けば、同様です。

来週の研究で見ると、パウロは、コロサイの信徒が福音によって与えられた希望を固く守り続ける代わりに、人間的な救いの方法を追い求めるようになるのではないかと心配しています(コロ2:8、20~22参照)。「ゆるぐことがなく」という言葉は、神の言葉に基づく信仰と愛の堅固な土台を築いたことを意味します(マタ7:25、エフェ2:20、3:17参照)。

この考えに関連しているのが「しっかり」と訳されているギリシア語で、これは不動の構造物を指しており、ひいては「福音の希望から離れ」(コロ1:23)ないクリスチャンを指しています。同じ言葉がIコリント15:58にも使われています。「動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです」

「一度救われたら、永遠に救われている」という通説に反して、パウロはまったく異なることを言っているのです。

訳注\*原語や英訳の聖書では、コロサイ1:23が「もし」という言葉で始まっている。

問3 コロサイ1:24、25を読んでください。パウロはキリストのために苦しんだことについて、何と書いていますか。

パウロがコロサイの信徒への手紙を書いたのは、ローマでの自宅軟禁中のことでしたが、おそらく彼の最大の苦しみは、かつてのように町から町へ、家から家へと精力的に働けなかったことでしょう（使徒20:20）。キリストが前もって警告されたこれらの<sup>かんなん</sup>艱難（苦難）は（マタ24:9、ヨハ16:33）、「将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足り」（ロマ8:18）ません。これがより大きな視点です。パウロはフィリピのクリスチャンに書き送ったように、今度はコロサイの信徒に宛てて、彼らのために益となる自分の苦しみを喜びとしていると書いています（コロ1:24）。

パウロは牢獄にいるかもしれませんが、「神の言葉はつながれていません」（Ⅱテモ2:9）。パウロがこの監禁状態にあった間に、フィリピやエフェソの信徒への手紙とフィレモンへの手紙も書かれ、また釈放後、神はパウロに、Ⅰテモテへの手紙とテトスへの手紙にある重要な勧告を記すよう、靈感を与えられました。そして、ローマの牢獄で最後の投獄生活を送っていた間に、彼はⅡテモテへの手紙を書きました。要するに、この最後の数年の間に、パウロは、おそらくヘブライ人への手紙も含む、新約聖書のかなりの部分を書く機会を得たのです。

神の永遠の計画は、これらすべてとそれ以上のことを予見していました。パウロがコロサイ1:25で用い「務め」と訳されているギリシア語は、一般的に「管理」と訳される「オイコノミア」です。この言葉は、限定的な意味だと（例えば、Ⅰテモ1:4）、「物事を秩序立てる神の方法」（ルーク・T・ジョンソン『Ⅰ・Ⅱテモテへの手紙』164ページ、英文）を指します。これにはパウロの使徒職も含まれるでしょうが、より広い意味では、救済計画において神が定められたあらゆるものが含まれます。パウロやそのほかの使徒たち、そしてモーセを含む旧約聖書の預言者たち（エフェ2:20、3:5）の働きは、「神の御言葉を……余すところなく伝える」（コロ1:25）ために意図されたものであり、すべてこの神の計画とつながっていました。

この主題については、明日の研究でさらに詳しく見ていきます。しかしこの時点で、パウロが自分の働きを、「天地創造の時から（前に）」（マタ13:35、エフェ1:4）始まっていた、はるかに大きく長期的な神の計画のほんの一部にすぎないことを認識していたことに気づくことは、有益です。

問4 コロサイ1:26、27を読んでください。「秘められた計画」について、パウロは二度語っています。どのような秘められた計画でしょうか。

別の箇所、パウロは「神の秘められた計画」について言及しています。それは、「神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられ」（Ⅰコリ2:7）、救済計画を通して明らかにされた神の永遠の目的です。ペトロはこの真理を、預言者たちが期待し、「天使たちも見て確かめたいと願っているもの」（Ⅰペト1:10～12）だと言っています。それは、「天地創造の前から」（同1:20）考案され、「世々にわたって隠されていた」（ロマ16:25）ものです。しかし、キリストの生涯、死、復活を通して、この秘められた計画は明らかにされました（Ⅱコリ3:14）。

問5 神の秘められた計画に言及している次の聖句は、救済計画のさまざまな側面を、いかに明らかにしていますか。

(1) エフェソ1:7～10

(2) エフェソ3:3～6

最終的に、天と地の「あらゆるもの」がキリストのもとに完全に一つにされます。これがヨハネ17章におけるキリストの祈りの焦点でした。それがどのように実現するのかは謎でしたが、今や福音によって明らかにされました。

私たちの救いのために、なぜ神が天の貴重な宝であるイエスを与えるほど、私たちが愛してくださるのかは、永遠の研究課題でしょう。しかし、私たちは次のことを知っています。キリストは、「すべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです」（Ⅱコリ5:15）。その結果、キリストを信じるすべての人が福音を通して神の約束に等しくあずかり、教会という一つの体に集められています。

「あなたがたの内におられるキリスト」（コロ1:27）とは、信仰によってキリストが心に住まわれること（エフェ3:17、ガラ2:20と比較）を指します。キリストとのこの霊的な結びつきにより、信者は今でも、「共に天の王座に着（き）」（エフェ2:6）、「来るべき世の力」（ヘブ6:5）を味わえます。

問6 コロサイ1:28、29を読んでください。パウロの焦点は何ですか。「すべての人」という言葉が繰り返されているのは、なぜだと思いますか。

パウロの宣教の焦点は、キリスト、しかも十字架につけられたキリストでした(Ⅰコリ1:23)。エフェソ5:27によると、キリストが犠牲となられた目的は、「しみやしわやそのたぐいのものは何一つない、聖なる、汚れのない、栄光に輝く教会を御自分の前に立たせるためでした」。したがって、パウロの福音宣教の目的は、「すべての人がキリストに結ばれて完全な者となる」(コロ1:28)ことです。パウロはこれを、教えと諭し(警告)によって行います。つまり、キリスト教の教理と実践のさまざまな点を教え(Ⅱテサ2:15、Ⅰテモ4:11、5:7、テト1:9)、福音を拒絶した場合の結果と偽教師の危険性について諭したので(使徒20:29～31、ロマ16:17)。

こうして私たちは、聖書の教えを受け入れ、その警告に従うことによって、成熟した(完全な)クリスチャンに成長していきます。成熟は重要な概念です。生まれたばかりの赤ん坊を持つ親は、初めて言葉を発し、初めて歩き、初めて読んだことなど、あらゆる節目となる出来事を祝います。数年経っても自分の子どもが歩いたり、話したりできなかつたら、心配しない親がいるでしょうか。成長と発達、正常なことであり、当然のことです。クリスチャン生活でも同じことが言えます。

「完全な(成熟した)」と訳されているギリシア語(「トレイオス」)は、完全で欠陥がないという意味です。クリスチャンとして成長する過程を通して、私たちは神の律法の深さと、その要求が「広大」(詩編119:96)であることを痛感するようになります。私たちは、神の律法が「心の思いや考え」(ヘブ4:12)にまで及ぶことを理解するのです。

しかし、私たちは注意する必要があります。パウロがコロサイ1:28で「諭し(警告)」という言葉を使ったのは、そのためです。道が「まっすぐなようにも／果ては死への道となることがある」(箴言14:12)のです。霊的識別力は、聖霊に導かれた神の言葉の知識からもたらされます。偽りの教えは、たいてい何らかの真理が含まれていますが、聖書の教えに何かを付け加えたり、取り除いたりしています(イザ8:20参照)。このような欺きは、神の言葉を真っ向から疑わせるとまではいかななくても、少なくとも、それが本当に可能かどうか、あるいは現代に適用できるかどうかを問うことによって、しばしば成功を収めます。教理上の真理と誤りを識別することに関しては、蛇のように賢く、鳩のように素直でなければなりません。

「私たちは……神の掟の要求に応じるほどの義を持ち合わせていません。けれどもキリストは、私たちのために逃れる道を備えてくださいました。……もしあなた自身をキリストにささげ、キリストを救い主として受け入れるならば、あなたの人生がこれまでいかに罪深いものであっても、彼のゆえに義とみなされるのです。キリストの品性があるあなたの品性のかわりとなり、神の前にまったく罪を犯したことの無い者として受け入れられるのです。

それだけでなく、キリストは私たちの心も変えてくださいます。信仰によって、キリストは私たちの心の中に住まわれます。こうして、信仰と、絶えずキリストにみずからの意志を従わせることによって、キリストとの関係を持続するのです。このようにする限り、キリストはあなたのうちに働いて、み旨に従って望み、行うことができるようにしてくださいます。……

ですから、私たち自身のうちには何ら誇るところがなく、自己を賞揚する何の根拠もありません。私たちの唯一の希望は、キリストの義が私たちの義とみなされることであり、それは、私たちのうちに働き、私たちを通して働いてくださる聖霊の働きによる以外にはないのです」(『キリストへの道』改訂第三版文庫版87～89ページ)。

「私に与えられた光が非常に強力なために、多くの人が誘惑の霊や悪霊の教えに心を引かれて、私たちのもとを離れるでしょう。主は、真理を信じると言うすべての人に対して、真理についての理性的な知識を持つように望まれます」(『伝道』下巻18ページ)。

### 話し合いのための質問

- ① 今週の暗唱聖句を読み直してください(Ⅱコリ5:21)。キリストが私たちのために罪となられたとは、どういう意味ですか。このことは、十字架の身代わりの性質を理解するうえで、いかに役立ちますか。また、「その方によって神の義を得る」とは、どういう意味でしょうか。
- ② 多くのクリスチャンが、「一度救われたら、永遠に救われている」と信じています。なぜ私たちは、これが誤った教えであると信じているのでしょうか。この教えを信じる人には、どのような明らかな危険性がありますか。この教えを否定しながらも、私たちはいかにして救いの確信を持つことができますか。
- ③ あなたの信仰は、どれほど「ゆるぐことがなく、しっかり」(コロ1:23、口語訳)したものでしょうか。自分が何を信じ、なぜそれを信じているのかを、どれほどよく理解しているのでしょうか。自分が信じていることをより深く知るために、何ができるでしょうか。また、信仰において「ゆるぐことがなく、しっかり」することは、なぜ重要なのでしょうか。